

Title	ゴンクール兄弟『ルネ・ モープラン』(第一～三章)(翻訳)
Sub Title	Edmond et Jules de Goncourt Renée Maupérin (chapitres I, II et III) (traduction)
Author	山本, 武男(Yamamoto, Takeo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2013
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. フランス語フランス文学 (Revue de Hiyoshi. Langue et littérature françaises). No.56 (2013. 3) ,p.85(40)- 124(1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030184-20130329-0124

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ゴンクール兄弟『ルネ・モーブラン』（第一―第三章）（翻訳）

山 本 武 男

解説

124 (1)

ゴンクール兄弟（エドモン一八二二―一八九六、ジュール一八三〇―一八七〇）は実に多様な才能を持った文学者である。彼らは自然主義、印象主義の小説家であり、十八世紀フランスに就いての歴史家であり、旧体制下の美術や日本の浮世絵などの蒐集家であると同時に研究者であり、また自らが生きた十九世紀後半のフランス社会を克明に記録した有名な『日記』の作者でもある。ここに訳出した『ルネ・モーブラン』は一八六四年にパリで刊行された長編小説である。本作品は弟ジュールの死後の一八七五年に改訂版が出版されているが、その際、兄のエドモンは一八七五年一月二十四日付で以下のような序文を追加した。

『ルネ・モーブラン』というのは、本当にこの書物の題名として相応しいであろうか？ 『ブルジョワジーの若者たち』というのが、弟と私が完成前にこの小説の刊行を予告した際に付けておいた題名であったのだが、この方が一八六四年に我々が試みた同時代の娘の心理分析の仕事をより明快に言い表してはいないであろうか？ しかしながら今日に至って書物の題名を変えらるゝというのは、如何にも遅きに失した感がある。従つて今は読者に対し、諸般の小説に做つた虚構性は本作品に於いては二の次の問題に過ぎない、ということ告げるに留める。

實際、我々作者は最優先の課題として、なるべく想像を排除しつつ、ここ三十年の芸術重視かつ男性的女子教育が産み落とした典型的な現代の娘を描こうと努めたのである。そしてまた作者は何にも増して、ルイ・フィリップ王が即位して以来、純理派（ロワイエ・コラール、ギゾーらの王政と革命の折衷を唱える一派）の人々の得ている高い地位や議会政治の支配の影響で、コレージュ（中等学校）を卒業するころには形成されている現代の青年像を示そうと腐心したのであった。

この序文は『ルネ・モーブラン』を読み解く場合のみならず、ゴンクール兄弟の著作全体を考察する際の大きなヒントになるだろう。ゴンクールはルネ・モーブランなる想像上の人物の名を作品のタイトルにすることが、同時代のブルジョワジーの若者たちの実態を描出しようとするこの仕事にとつて適切であるかどうかを問うているのである。ゴンクール兄弟の多岐にわたる業績のうち歴史や美術などの研究書が重要な位置を占めていることは先に触れた。ところでその際に用いられる、対象を観察して分析し描述する近代的な学問の方法はゴンクールの場合、小説に於ける創作態度にまで及んでいたのである。そう考えてゆけば、始めに付けようとしていたという『ブルジョワジーの若者たち』なる題名は、確かに小説よりも寧ろ同時代の世態風俗の研究書によく似合いそ

うに思われてくる。

だが、こういったゴンクールの、自作は空想よりも現実の観察に基づいて書かれているとする研究者的な意識とは裏腹に、読んでみれば分かることであるが、『ルネ・モーブラン』はなかなかロマネスクな作品である。確かに主人公ルネにはモデルがあり、それはジュール・ド・ゴンクールの竹馬の友である、後に政治家になるルイ・パッシーの妹のブランシュ・パッシーであり、『日記』の中でブランシュの描写を見ていくと、彼女の性格などがルネの人物造形の際に大いに参考になったことが理解される。例えば一八五六年九月二十二日付の記述には、割合と長いブランシュの人物描写が現れる。男性的な忠誠心と理性を持ち、美なるもの、偉大なるもの、献身的な行為への限らない憧れを有し、第一印象で相手に対する好悪の感情を決定する。率直さを好まぬ者たちには嫌われるが、我々（ゴンクール兄弟）の様な懐疑的な人間からは好意を抱かれることがある。目は微笑を湛えていて、顔は細長い。社交界の嘘が嫌いで、自分の身に起ったことを正直に話す。かましい声で会話をするが、内心には憂鬱を抱えていて、心の琴線に触れる曲はショパンの「葬送」。迷信を信じ、十三日の金曜日を子供のように忌避する。学問と芸術の最良のものを嗜好し、乗馬や馬車の運転を愛す。洒落っ気のある小さな足に何時も足の甲の見える踵の高い靴を履いている。父親を熱愛している。と云ったところであるが、このブランシュ・パッシー像は確かに小説中のルネ・モーブランの姿に重なる点が幾つかある。

読者はルネの憂鬱を孕んだ賑やかさ（第四章）、ショパンの「葬送」をピアノで弾く姿（第二十七章）や、十三日の金曜日を忌避する発言（第一章）、油彩の趣味（第一章、第十一章）、乗馬の趣味（第一章）、馬車の運転を楽しむ姿（第十二章）、足の甲の見える靴（第十一章）、また全編に漲る父親への熱愛といったことを思い起こすであろう。しかしブランシュがルネのような人生を歩んだわけではないので、小説に描かれたルネの劇的な運命は兄弟によるまったくの創作である。ここに至って上記の改訂版の序文でエドモンが言う、本作品では虚構性

は二の次だという主張が明確になる。すなわちブランシュ・パッシーに同時代の娘の一典型を見て取った兄弟は、その性向を研究して、それをもとにルネ・モーブランなる人物を造形し、自らが設定した人間関係のなかに彼女を置いてみてその運命の成り行きを構成したので、その際もとても重要なのは彼らの研究に基づいて描かれている若者たちの心性だというのである。

ブランシュとルネの共通点に於ける、父親への熱愛という性向は『ルネ・モーブラン』を本質的に理解する為の鍵となる。第一章から物語はいきなりルネのお見合いで幕を開ける。ルヴェルシオンなる醇風良俗に適った青年と川で泳ぎながら取り留めもなく会話を交すルネは、二人して波に翻弄され、暮れ方の日差しを浴び、周囲の風景を眺めたりしつつ、互いの趣味などに就いて語り合うが、主にルヴェルシオンの方が聞き役に回って、おしやべりなルネに好きなだけ話をさせている。このような川遊びをしながらのお見合いというのはかなり違和感があるが、この際の監視役のルネの兄アンリが施した設定であつたかもしれない。何れにせよ、それを受け入れたルネはそうとう大胆な性格の持ち主であると見て取れよう。これも、一八七五年の改訂版の序文に出て来る、男性的女子教育の成果なのであろうか。

さてこの川遊びが済むとモーブラン家の家族あげての夜会にルヴェルシオンは招かれるが、ルネはまったく彼の視線、彼がどう思うかなどには頓着せず、幼少の頃より養子同然にモーブラン家に住み込み一緒に育ったドノワゼルの髪を人前でじゃれ合いながら切るといふ悪ふざけを敢行する。ルネにしてみれば、このような醜態をわざと晒してみせることでルヴェルシオンに対する無関心を示すと同時に、彼が自分を嫌になり遠ざかるよう仕向けた積りだったのである。結果、この話は立ち消えになり、長女アンリエットを然したる苦勞もなくダヴァランド家に嫁がせたあと、今度は次女ルネの結婚相手がなかなか見つからないことを気に病んでいた母親は、この問題に関して呑気に構えている夫と口論になる。その際、夫であるモーブラン氏は立ち消えになった話の相手、

ルヴェルシヨンのことを、どこにでもある男であると看做し、一方ルネは唯一無二の価値を持った女性であると擁護する。

この父にとってルネは特別な子供であつた。軍人であつた彼は、自分の子供の中でも、内気で人見知りをする長女や、少女のようにひ弱な長男アンリに馴染めず、開放的な性格の次女ルネを以て初めて自分の子供を得た実感を覚える。こんな父親の思ひは幼女の頃から二十歳の現在に至るまでのルネへの溺愛という形になって現れることとなった。そして娘もまた父親の思ひ入れに對し熱愛を以て応えたのである。だがそんな父もやはり娘の將來に不安を抱き始め、ルネを前にして、自分ももう若くはないので結婚の努力をするように促すようになる。しかしルネはこの父親の危惧の本質的な部分は理解できずに、彼がそう遠からず必ず訪れる自らの死を口にしたことから混乱し、悲嘆に暮れつつ、彼女にとっては父親が最高の恋人であり、彼に比べたら他の男に魅力を感じるなどなど出来ないと言明する。この出来事以降、父は娘に結婚を強いようとはせず、物語の中でルネが父親への恋人に對する時の様な熱烈な愛情を再び告白するのは、物語も終りに近い、心臓の病に倒れて自らの死期を悟つたところである。

この父と娘との近親相姦的な情の交わりは、娘の結婚を妨げた原因であるが、こういった親子関係とそこから生じる婚期の遅れといった問題は、我々が生きている現代の核家族化した家庭でもしばしば見掛けられるので、この『ルネ・モーブラン』という十九世紀半ばにフランスで書き上げられた小説は時空を超えた普遍性を持つものと言つてよいであろう。初めてこの小説を読んだとき日本人であるわたくしは、日本の現在を描いた小説を前にしているかのような錯覚に捕われたのを忘れない。さらに、このような何処にでも見られる反面、人生や社会の問題としてデリケートな面を多分に含んだこのような難しい主題を扱った小説をわたくしは寡聞にして知らない。この点に鑑みても、それを小説にまで高め得たゴンクール兄弟の芸術的野心と繊細な感性に裏打ちされた才

能は賞賛されて然るべきである。当時新鮮だった主題への挑戦は、百五十年近く過ぎた今日でも未だに新鮮なのであり、『ルネ・モーブラン』はまさに我々の時代の親子関係の一断面を本質的に考察する際の恰好の拠り所を提供してくれているのである。

ところでルネの兄アンリは、エドモンが一八七五年の改訂版の序文で触れている通り、一八三〇年のルイ・フィリップ王即位後のある時期の青年たちの一典型を表したものと看做して差し支えないであろう。彼に見られるものは徹底した出世主義であり、恋愛もその為の道具に過ぎないものと割り切った態度である。純理派（ドクトリネール）と呼ばれる論客、政治家たちが勢力を張っていた時代であった。このアンリは、母親の愛を一身に受けて育った。母は、仕事の忙しさにかまけて構ってくれない夫への愛の捌け口を、長男の教育に求めたのだ。生まれつき病弱だったアンリを母は手塩にかけて育てるが、やがてアンリがコレージュの寄宿舎に入る頃になると毎日、面会時間には訊ねて行き、周りの父母の間でも噂されるほどの溺愛ぶりを発揮する。日に日に男らしく成長していくアンリの姿に、母は英雄を眺めるかのような頼もしい視線を投げかけた。

そんなアンリはやがて弁護士となり、様々なサークルや政治結社に顔を出し、顔売って有力な人々に近付き、その頃のサロンの、大学教授が大いに持て囃される街学的な時流に乗って、貧困救済を主題とした論文を雑誌に寄稿するなどし、エコノミストとしても注目を集めてゆく。だが母は、ルネに対してと同様、アンリに対してもその結婚に関して危惧し始める。地方に住むモーブラン家から出て、パリで独立して暮らしを立てていたとはいえ、いっこうに結婚しようとする気配の見えないアンリに対し、ある日、彼の住居を訪ねた母は正面切って彼にこの問題に就いてどう考えているのかを問う。するとアンリは母の心配をよそに、けろりとした様子で、この世で一番手に入りにくいものは財力であり、自分は結婚を通して一財産を築く積りであり、その為には結婚を情の問題として捉えず、ただ金力を得る為の道具と看做すのだ、それだけを考えていれば目指す目的は達せられるの

だという割り切った彼なりの結婚観を披瀝し、母親を圧倒し、感心させてしまうのである。しかもアンリのこの「理論」は、財力に定評のあるブルジョア家の、母と娘との二重の恋愛という形で実践されていたのだ。

ブルジョア家の莫大な財産を手に入れる為に、その家の娘と結婚しようと考えたアンリは、かの家と自分の家との間に横たわる大きな財力の隔たりに鑑み、直接にこの要求を切り出すことの不可能から、まずその母ロールの愛人となってブルジョア家に接近し、彼女に勘付かれないように注意しつつ娘のノエミとも情を交す仲となる。ある夜の席でこのことに気付いたブルジョア夫人がアンリを問い詰めると彼は、計算しながら偽りの苦しそうな表情を作って事実を認めるのである。この辺りのアンリの心理描写には、あの十八世紀のロマン・ノヴァール（暗黒小説）の代表作、コーデルロス・ド・ラクロの『危険な関係』を思い出させるような鬼気迫るものがある。ブルジョア夫人は葛藤の末、娘の仕合せを考えた結果であるとして、自分はきっぱりと身を引き、ノエミをアンリに嫁がせる決意をした旨を彼に伝える。ブルジョア夫人はまんまとアンリの術中に嵌ってしまったかに見えたが、結婚に向け、自らの名に領地の名を付け加えて箔を付けようと企てた彼の前に、没落した領主の末裔が現れ、決闘という不測の事態に巻き込まれて死ぬことで望みを果たさずに終る。

このアンリに表徴される冷徹で計算高い青年像は、今日のフランスでも、日本でも、そう沢山は見掛けることはいないかと思われ、いわば當時に特徴的な一典型かと判断されるのだが、彼の成長の過程で見られた、夫に注ぐことの出来ない愛情を集中的に息子に注ぎ、その子の成長していく姿に見惚れてしまう母親像は今日の社会に於いても幾らでも見出すことの出来るものである。ルネのモーブラン氏に対する恋人への熱愛に似た執着といい、モーブラン夫人の息子に対する尊崇に似た感情を含む溺愛といい、核家族内での近親相姦的な人間関係はこの小説の大きな主題であり、とくに半ばから後半に掛けてのロマネスクな展開に於いても常に通奏低音の役割を果たしていると思われるであろう。

『ルネ・モーブラン』は家庭小説であると同時に政治小説でもある。モーブラン家のサロン（客間）に集い来る人々の姿には当時のフランス社会の縮図を見て取ることが出来る。少年時代から休暇の度にルネの家に間借りして育ったドノワゼルは貧者の救済や女性の社会進出に関心の高い、いわゆる進歩的な青年であり、彼に真つ向から対立しているのがルネの代父バルースである。彼は、ドノワゼルの様な考え方が大革命後にブルジョワジーが得た利権を脅かすものと看做して排斥しようとする。バルースが大革命後の世代のブルジョワの一典型なら、ドノワゼルは一八四八年の二月革命を引き起した思想の代弁者とも取れよう。またサロン小説としての側面も見逃せない。モーブラン家のサロンで行われる芝居や音楽を伴う催しの様子などは、当時の世態風俗を知る縁となる。社交界の結婚を取り持つことで評判のブランボワ神父の存在も注目に値する。彼を通して浮き彫りとなる教会と社交界との関係からは、この時代の宗教そのものの社会に於ける位置が仄見えてくる。

アンリの愛人だった資産家の妻のブルジョ夫人の姿に注目して読めばこの小説は、近代フランス文学の主流をなした、『赤と黒』や『谷間の百合』、『ボヴァリー夫人』、『感情教育』などに代表される姦通小説の系譜に属するものであることも分かる。『ルネ・モーブラン』は、ゴンクール兄弟が小説家として最も油の乗り切った時期に書かれた作品のひとつであり、翌一八六五年には彼らの小説の代表作『ジェルミニ・ラセルトゥー』も刊行されている。いきなり冒頭から長い会話文が始まり、そのうち全編にわたって会話を目立って多用したこの小説のスタイルはゴンクールの作品中でも特異な例であり、話者の言葉をそのまま写し取ったかのような一連の遣り取りは、読者にその場に居合わせているかのような臨場感を与える。新しいものの好きのゴンクールなりの実験的な試みであったと捉えるべきであるかもしれない。登場人物たちの会話の内容に注目してみると、金銭の話が忌憚なく誰彼の口からも発せられているのは、大革命後のブルジョワジー全盛の時代の金銭万能とでも言うべき社会の価値観を浮き彫りにしていて興味が尽きない。『ルネ・モーブラン』は経済小説として読めば、当時の資本

のあり方を深く考察する恰好の手掛かりにもなる筈である。

最初の章でルネがルヴェルシヨンと川遊びをしているときの二人の姿や、水の流れ、或いは周囲の景色の描写は、どこか絵画の印象派と一脈通じる空気の漂った筆使いだと言えるであろう。比較的短い章で断片的な様々なエピソードを繋げていく手法も、読者にその情景の印象を鮮烈に残す。絵画の印象派が、それまでの伝統的な宗教画や歴史画などの論理的な理解を要求する内容を含むジャンルを拒否し、目の前の人や自然を見たまま、網膜に映ったままに描こうとしたのと相似てゴンクールも聞いたまま、見たまま、即ち外界の現実を、解釈を極力廃し、文字で写し取ろうとしたのである。こういった面には、ゴンクールが印象派の小説家だと評価される面目が躍如としている。

では一方、「自然主義の鼻祖」としてのゴンクールの特性は『ルネ・モーブラン』の中ではどのあたりに求められるであろうか。それはやはり真実をありのままに描き伝えようとする兄弟の姿勢、一八七五年の改訂版の序文で示された、当時のブルジョワジーの若い男女の真の姿を描き出そうとする覚悟に行き着かざるを得ないであろう。その創作態度が結果として我々読者に突付けてきたものが、先ほど論じた近親相姦的な家族関係であり、それは即ち装飾を排して描いた十九世紀半ばの、しかしまた今日にも通じる「家族の肖像」である。畢竟ゴンクールの印象主義と呼ばれるものや自然主義と呼ばれるものは、彼ら自身が主張していた「真実の小説」(roman vrai)と云う理念に根ざしたものである。人は概して真実を見詰める勇氣を持たない。ゴンクール兄弟は現実を見据える勇氣と、その真実を正確に観察し分析する高い知性と、その問題点の本質を抉るだけの繊細な感性とを有していた文豪であったのである。

〔翻訳〕

一

「社交界はお嫌いなのですか？ お嬢さま」

「人には言わないで。わたし、ああいう所では、黙りがちになってしまうの……社交界に出るとそうなるの、わたしは。あんなったのも多分、運が悪かったのね。勤勉な、兄のお友達たち、「引用青年」なんてわたしが呼んでいる若い人たちにばったり出会ってしまったの。若い女の子たちとは、最近教会で聞いたお説教だとか、練習したばかりのピアノ曲とか、卸し立てのドレスのこと位しか話することが出来ないし。決まりきってるのよ、同い年の子たちとの会話って」

「確か、一年じゅう田舎でお暮らしでしたね？ お嬢さま」

「ええ……でもここはパリからすぐの所じゃない……ね、最近オペラ・コミック座でとても素敵な演目があったてほんと？ ご覧になられて？」

「ええ、お嬢さま、良かったですよ……音楽は、相当な腕前でした……初日にはバリ中のお歴々が集まるのですよ。申し上げておきますが、わたくしは何時も初日に出席することになっているのです」

「想像してみてください、わたしが連れて行って貰える唯一の劇場、それがオペラ・コミック座なの……フランス人の俳優が出てきて……名作が、フランス人向けに訳してある。退屈ね、名作って！ ねえ、わたし、パレ・ロワイヤルに行くのは禁止されているの、分かるかしら、この詰まらなさ！……わたし、戯曲は読むほうなのよ、例え

ば……夢になつて客寄せ道化の台本の『旅芸人』を暗誦したりするほど……あなたは何処へでも行けるんですもの、あなた……良いご身分だわ。何時かの夜など、姉とその主人との間で言い争いになって、オペラ座の舞踏会に行くとか行かないとかいう話でもめたんだけど……あそこへは行けたものじゃないって本当なのかしら？」

「行けたものじゃないって、お嬢さま……驚きましたね……」

「ほら、もしあなたが結婚なさっていたら、一度は奥様をお連れになつて、見に行かれるんでしょ？」

「お嬢さま、もしわたくしが既婚でも、あんな所に妻を連れて行つたりなんか致しませんよ」

「奥様のお母さまが禁じられるとお思いなんじゃ御座いませんか？……本当に、そんな酷いところなのかしら？」

「ま、しかしお嬢さま、まず、人間の構成が問題なのでして……」

「雑多な人間が来るってことでしょ？ その手のことなら経験済みだわ。だって何処でもそうだもの……たくさんの人が詰めかけるラ・マルシュ（ヴォークルソンの競馬場）……そう、あそこは、ほんと色々な人がいて、大好き！ あのご婦人たちの姿を見るの……ちよつと変な感じ……馬車の中でシャンパンを飲んでたり……まあ、あれがブローニユの森なのよね！……でも若い人って詰まらないわ、そうお思いになりませんか？」

「え、ご冗談でしょ、お嬢さま。それはまたどうして？ わたくしにはその反対だと思われんですが……」

「あなたに現場を見てもらいたいわ！ そうすれば、なんでこれ程うんざりしているかが分かるわ、適切、でいなくてはならないことの鬱陶しさが。ほら、わたしたち、舞踏会に出るじゃない、ね。わたしたち女の子ってダンスのとき、パートナーとおしゃべり出来ると思う？ はい、いいえ、いいえ、はい……そんな返事しかしてはいけないの。何時も一音節で答えなくちゃならない……それが適切でいることなのよ！ ね、わたしたちの生活って窮屈でしょ……おまけに、万事にわたってこんな調子……程よく適切でいること、それは馬鹿の真似をすること……わたしにはよく分からないのだけれど……それから、同性の子たちと詰まらないおしゃべりをし続け

なければならぬこと……運悪く男の人たちの集まりから呼ばれてそちらへ行きでもしたら……わたしなんかママンに後でこっぴどく叱られてしまったワ。それからもうひとつ、わたしたちにはぜんぜん適切でない行為、それは、何かを読むこと。たった二年前よ、新聞の連載小説が許されたのが……新聞の三面の犯罪記事も読ませてもらえないの、適切とは言えないっていう理由から……わたしたちに許されているのは、これだけの範囲で喜べる才能つてところかしら……ある種の低い平均値みたいなものを超えてはいけなくて、つまりピアノの連弾だとか木炭デッサンを越えてしまうと、特別な、構えた感じになる……ほら、わたし、油絵描くでしょ、それを家族が嫌がるのよ……水彩で薔薇だけ描いていればいいんだって感じ……ところでここ、流れがきつくありませんか？ 立っているのがやつとよ……」

これらの会話はセーヌ川の、ラ・ブリッシュとサン・ドニ島の間の支流でなされていた。

この様な会話を交していた若い二人は水の中にいたのである。泳ぎ疲れ、流れに翻弄された二人は、島の岸に横付けになっている幾つかの船の一艘を繋ぎ止めている綱に掴まった。ぴんと張られ、小刻みに震えている綱の先端にいる二人を、水の力が緩やかに揺さぶった。二人は一寸流れに吞まれそうになってから、再び水面に浮上する。娘の胸元を打っていた水は、ウール製の水着の中を首のところまで上がって来るや、後方へ小さな波を起す。すると、一瞬間の後には耳朶から今にも落ちそうな一滴の露を残して去った。若い男より高い所に掴まっていた彼女は腕を水面に出していて、両方の手首はより良く綱を握ろうとして振れており、船の黒い木製の舷側を背にしていた。この娘は羞恥心から絶えず、流れが彼女の方へ近付けて来る若い男の肉体に自分のそれが触れ合わない様にした。こんな風にぶら下がりながら逃げ腰を使っている姿勢のせいで、娘はガレー船の脇腹に彫刻家たちが彫り付けた逆巻く海の中の女神たちの姿に似ていた。川の動きで訪れる冷たい水に刺激され、一瞬身震いをすると、彼女の周囲に漣が立った。

「ああ、これはとんでもない事だわ」と彼女は再びしゃべり出した。「あなたと泳ぐなんて、どう考えても適切でないことよ……。もし、わたしたちが、海水浴に来ているなら、また感じが違ってくるのだけれど。海でも、今と同じこの恰好になる。わたしたちが家から下って来て川岸を歩いたように、更衣室から降りて来て浜辺を歩く……この同じ位の深さまで水に入る……この流れと同じ様に波に揺られて……でもそれがもうぜんぜん同じじゃない、まったく別なのよ。つまりセーヌ川の水は適切でないということなの。あら！わたし、お腹が空き始めたワ……あなたは？」

「いや、お嬢さま、お夕食はたっぷり頂くつもりでおります……」

「あら！じゃお知らせしとくわ、わたし、食べるわよ」

「それはまた、どんな具合に、ですか？　お嬢さま」

「ええ、わたし、お食事どきになると詩が欠けてしまうの……たくさん食べているのを隠そうたって、ごまかしが利かないわ……。あなたは、わたしの姉の旦那さんと同じサークルの人なの？」

「そうですよ、お嬢さま、わたくしはダヴァランドさんと同じサークルですけれど」

「あなたのサークルには、結婚なさっている方は沢山おられるのかしら？」

「多いですね、お嬢さま」

「変よね……どうして男の人って結婚したがるのか、分らないわ。もしわたしが男に生まれていたら、決して結婚のことなんか考えなかったらうと思うけれど」

「女性にお生まれになって宜しゅう御座いましたね、お嬢さま……」

「あら、それがまた厄介なのよ。わたしたち女は独身ではいられないもの……だけれど、どうして既婚者がサークルに入る必要があるのか、教えてくだらないかしら」

「お嬢さま、パリでは先ずサークルの一員になっている必要がありますのです……ある程度地位のある男なら誰でもですね……そこでただ煙草を吸うというだけの目的であっても……」

「何ですって、じゃあ喫煙室の無い家に住んでいる奥さんがまだあるってことかしら……わたしは別に、安いパイプの煙でも我慢できてしまいますけど」

「近所付き合いは御座いますか、お嬢さま」

「あら、わたしの家からお隣さんの家までって、かなり遠いの……サノワにブルジョさんのおうちがあつて、家族で時々お訪ねしますわ」

「ああ、ブルジョさんの家……では、近所ではどなたともお会いにならないのですね？」

「あら、司祭さんがいらつしやるわ……そうそう、司祭さんが初めてうちでお夕食を取られたとき口を濯ぐ為の水を吞まれてしまったの！ あ、こんなこと、言うべきじゃないわね……とても良い方よ……何時もわたしにブーケを持って来てくださるし……」

「お嬢さま、御乗馬はなさいますか。あなたのよう方には、大変良い気晴らしになると思われますが」

「ええ、大好きよ。わたしの最高の楽しみなの。あれなしじゃ生きていけないかもしれない位よ……特にわたしが好きなのは、犬たちと一緒に狩をすること……わたし、そんな環境で育ったの、パパの生れ故郷で……ああ、わたしって、熱中してしまうタイプなの……一日七時間も馬から下りずに過ごしてしまう者の気持ち、お分かりになって？」

「いやあ、お気持ちはよく分かりますねえ、お嬢さま……わたくしは毎年ル・ペルシュでボリユーさんの所の獵犬たちと狩をしますがねえ……お聞きになられたことは御座いませんか、彼が英国から連れてきた獵犬たちのことは……去年なんかその獵犬たちに捕えたその場で、豪勢にも普段の三倍の分け前を出してやりましたよ……」

ここではシャンティイで狩猟が出来ますね……」

「パパと一緒になら、狩りは絶対上手く行くわ……この間なんか、素晴らしかったのよ。ある時、みんなが楽しんだ後……馬が優に四十頭はいただけ……沢山でいることが馬たちを興奮させるのね、分かるでしょ……わたしたち、ギャロップで出発したんだけど……これだけは言わせてね。その日、わたしたち、池でとっても美しい夕日を見たの……澄んだ空気、髪を戦がせる風、犬たち、喇叭の音、目の前の木々のざわめき……わたしたち、陶醉しているみたいだった。あの時のわたしは勇敢だったわ、本当に勇敢だった……」

「その時ですか、お嬢さま」

「あら、勿論そうよ……馬に乗っているときだけ……だって、歩いていると……言っとくわね、わたし、夜がとても怖いし、雷、大っ嫌いだし……それに、今夜の晩餐に三人のひとが欠席なのをすごく喜んでるし」

「え、何故ですか、お嬢さま」

「十三人になるところだったのよ！……十四人になる様、小細工しよう、なんて詰まらないこと考えたのは、このわたしよ……わたしって、臆病でしょ！ あ、兄とドノワゼルが船を持ってこっちに来るわ。ねえ、ご覧になつて、ここからの眺めつて、なんて綺麗なんでしょう、何もかも、この時刻には……」

そう言つて彼女は視線で、セーヌ川を、その兩岸を、空を示した。

幾つもの小さな、紫色、灰色、銀色の雲が、地平線をたゆたい、流れ行き、その頂は白い輝きを抱き、天空の底で、水際に寄せる泡の様に見えていた。その辺りから空が伸びていて、無限に、青く、深く、明るく、輝かしく、そして既に青白く成り掛かつてもいて、日没を待つて星が輝き出す時刻を思わせた。ずっと高いところに、二つ、三つ雲が棚引いていたが、長く形を変えず停止していた。大きな一条の陽光が水面を這つていて、ある所では影を作り、またある所では輝き、船の陰では揺れる波が作る木目模様を銀色に見せ、マストや舵の頭の部分

に当たり、通り掛かる洗濯女のオレンジのマドラス織りのスカーフや薔薇色の頭巾を捕えた。

田園、場末の町そして郊外が岸の両側に連なっていく。ポプラ並木が、町外れで見る様な疎らな家々の間に見受けられる。背の低いあばら屋、板を張り巡らせた囲い地、庭、緑の鎧戸、赤く塗られた酒屋、戸口の前のアカシア、片側が窪んだ古い青葉棚、目隠しの白壁の端。更に、製造場の味気ない連なりや、煉瓦作りの建物、瓦屋根、亜鉛板の屋根、仕事場の鐘がある。工場からは幾本もの煙が真っ直ぐに立ち上り、それらの影は柱が映っているかのように水面に落ちていた。ある煙突の上には、「たばこ」と書かれている。ある崩れかけた正面玄関には、「ラビッシュ」とドルミュ、駄馬係」とある。平底舟で埋め尽くされた運河の上では、回転橋が黒い二本の腕木を天に向かって立てている。釣り人たちは糸を投げ、また引き寄せる。車輪を軋ませ、荷車が行ったり来たりする。引き摺られゆく曳船用の綱によって、石炭の滓や鉱物の残骸、また置き去りにされた化学物質等々で赤茶け、固くなり、黒ずみ、雑色で彩られた道の表面に削り取られた跡がある。蠟燭の製造所、ブドウ糖や澱粉の工場、精糖場が岸の上に散在していて、疎らな緑の中では、水蒸気と共に機械油と砂糖のぼんやりとした臭いやタールのそれが漂っていた。鋳物工場の喧騒、蒸気機関のシューシュー言う音が絶えず小川の沈黙を破っていた。その光景は、さしずめ同時にパリ近郊のアスニエル、オランダのサールダム、そしてピュトーに似ていたが、ピュトーと言えば、画家エルヴィエの描く、生えている草を上から握れば指の股から幾許かはみ出す様に自然があちらこちらで建物や労働者たちの姿や工場の間から顔を出し、不潔にして輝きがあり、貧乏にして陽気、庶民的にして活気がある、かの絵の世界に登場するパリのセーヌ河岸の風景の一つを有する土地である。

「どうですか、綺麗だと思われませんか？」

「はあ、お嬢さま、正直申し上げて、それほど感心出来ないのですが……綺麗なことは綺麗なんですけれど……まあまあですね」

「え、綺麗よ！　これが綺麗だつてことは請合うわ……展覧会で、二年前でしたけど、この手の光景が描かれていたの……ああ、誰の絵だったかしら……こんな感じだったわ……あたしは惹かれてしまうの……」

「おやまあ、生まれ付きの芸術家でいらつしやるのですね、お嬢さまは」

この言葉に、「そうかしら」と若い対話者は、ある種のふざけた抑揚を以て答えた。

そうして彼女は水の中に勢いよく潜ってしまった。そして再び水面に現れるや、向かつて来る小船の方へと泳ぎ始めた。解き放たれた頭髮は水に浸かっていたが、その半ばは後方に浮かんでいた。彼女は自らの髪を手に取り、それを揺すつて水を切った。

夜が迫っていた。空にはゆるゆると桃色の縞が広がっていった。小川の面に、一陣の風が立った。木々の梢では葉が揺れていた。酒場の入口で看板代りに使われている小さな風車が回り始めた。

娘が、小船の後ろに取り付けられた梯子に近付いて来ると、

「よお、ルネ、水の具合はどうだい」と漕ぎ手の一人が言った。

「いいわよ、ありがとう、ドノワゼル」

「いやはや、君は親切だねえ。まあ君の好きにすればいいが……なんだか心配だなあ……でルヴェルシオンは？……あ、なんだ、あんな所に」ともう一方の漕ぎ手が言った。

二

シャルル・ルイ・モーブランは一七八七年に生まれた。ロレーヌ地方やバロワ地方に於いて名声を得て誉を頂いた弁護士の子で、十六歳のときフォンテーヌブローの士官学校の生徒の立場で兵役に服した。前線歩兵第三

十五連隊付陸軍少尉に任命され、次いで同じ連隊の陸軍中尉となった彼はイタリアの戦線に於いて頭角を現した。ボルデノンの戦いで、既に負傷し、敵の騎兵隊の大群に取り囲まれ降伏勧告を受けたが、彼はそれに対し敵への襲撃命令で応え、自身の手で彼を脅迫した騎兵隊の内の一人を殺し、部下たちと共に進路を切り開いたが、数に押され、頭部を剣で二回打たれて流血の中に倒れ、その場で死んだ様に見せ掛け、遣り過させた。地中海第二連隊の隊長からルーセル・デュルバル大将の副官になり、一緒にロシアに遠征するが、モスクワの戦いの翌日、砲火の一撃で右肩を負傷する。一八一三年、二十六歳のときにはレジョン・ド・ヌール四等勲章オフィシエを受勲して陸軍中佐だった。陸軍内では、彼は最も将来を嘱望される若い上官の一人に数えられていたが、その矢先、ワテルローの戦いが彼の剣と希望を打ち砕いてしまった。休職給を得ながら、彼はソーゼ大佐、マジオ大佐と共に「バザール・フランセ」のナポレオン主義者たちの陰謀に加担した。法廷の役割を果たした王政復古期の貴族院が、欠席裁判で首謀者の一人として死刑を宣告したので、彼は友人たちにかくまわれ、アメリカ行きの船に乗せられた。航海中は無聊に苦しみ、医者として身を立てるためアメリカに向っている船中で知り合った人物を励ましつつ一緒に医学を学び、上陸するや彼の代わりに替え玉で受験したりした。アメリカに二年滞在の後、軍役に復した同僚たちの友愛の情や強い影響力のお陰で彼に恩赦が下り、フランスへの帰還が実現した。帰国すると、母の居る実家で暮らす為、ブルモンの小さな町へと向った。この母は、十八世紀には地方でしばしば見掛けられることが出来た上流の老婦人で、人を笑わせる言葉に長けており、少々の葡萄酒なら嘗ては腰も引けなかった。息子は母をこよなく愛した。再会したとき彼女は病身で、医者たちからあらゆる刺激物を避ける様に言われているので、息子は葡萄酒、リキュール、コーヒーを絶つことで母を誘惑しまいとし、禁酒を分かち合っその苦痛を和らげようとした。息子が結婚したのは、それを望む母を安心させる為ではなく、彼女の病人にありがちな我儘に対する深い敬意からであった。息子は特に自分の趣味にはこだわらず親戚の娘と結婚したが、その娘は、共

有の財産があること、土地が隣り合わせであることなど、田舎で家族同士とその財産を結び付けている全てのがらみを考慮して母が選り指名した相手だった。

母が亡くなり、何も彼を引き止めるものが無くなったこの小さな町で困窮し、パリでの滞在が禁じられているモーブラン氏は、ヴィラクルの農場を除き、ブルモンの家と彼が故郷に所有する幾つかの小さな地所を売り払い、バッシニーの奥地、モリモンに広い土地を買って、若い妻と共に移り住んだ。その土地で彼は、大きな修道院の名残の風物を所有することとなった。それは、修道僧たちが「この世との別れ」と名付けたその名に相応しい幾許かの土地で、百アルパン程の池と樹齢が分らないほど古い樫の森へと至る粗野で雄大な自然の辺境であり、草原は木々の枝の下を水が勢いよく流れる石垣で護岸を固めた幾本かの水路にはさまれており、植生は大革命以来放置されていて砂漠化の傾向にあるものの、物影には泉があり、野の花や獣道、廃墟になった建物に面しては荒廃した庭があった。ここかしこに積み上がった石材が残っていた。門や、物乞いにスーブを出したベンチが残っており、ここには屋根の無い礼拝堂の後陣が、あちらにはモンルイ風の七段に石を積んだ壁があると云った風であった。入り口の小屋は前世紀の初頭の建築で、唯一まだ建っており、全体が残っていて殆ど無傷だったが、モーブラン氏はそこに居を構えたのであった。

彼はその地に一八三〇年まで住むことになるのだが、学問の中で孤独に徹し、やつれ、読書にのめり込んで、そこから沢山の教訓、様々な分野の知識を引き出し、歴史家、哲学者、政治家らの言動で頭を満たし、そして徹底的にあらゆる産業に関する技術を深めた。彼は空気を吸うため、頭を冷やすため、体をほぐす為にのみ書物から離れ、野や森を横切って、六里の散歩に出掛けた。その地方ではこの男独特の散歩姿は有名だった。遠くからでも農民たちはその歩き振り、鉤を閉めた丈の長いフロック・コート、騎兵隊の士官らしい太い足、やや俯き気味の頭、葡萄酒から引き抜いて杖として使っている添え木を見分けることが出来た。

この様な勤勉で籠もりがちの生活から、モープラン氏は選挙を機に抜け出すことになり、県の至る所にその姿は出没する様になった。彼は二輪馬車で馳せ参じ、選挙人の集会を軍人の舌鋒で熱狂させ、省庁出身の候補者たちに任務を要求したが、それもまた、彼にとつては戦争だった。それから、選挙が終り、シヨームンを去つて、彼はまたもとの習慣へ、人知れぬ静かな研究生生活へと戻つた。彼は二人の子供を授かつたが、息子は一八二六年に、娘は一八二七年に生まれた。一八三〇年の革命が起つて、彼は国会議員に任命された。アメリカ型の理論を振り翳して議会に乗り込んだため、彼はアルマン・カレルに接近することになった。闊達で、唐突、軍人風にして話題に富んだモープラン氏の弁舌はセンセーションを巻き起した。ナシヨナル紙の大株主の一人となり、その思想的指導者になり、国の予算や財政を批判する記事をどんどん書かせた。テュイルリー宮殿内で頭角を現して来た彼に、新しい王の下で副官に任ぜられた昔の同僚たちは、司令官の様な年齢的には時期尚早の軍の高官の職を約束するとして、意向を打診してきた。彼はきっぱりと辞退した。一八三二年には、ド・モンタリヴェ氏が放つた「王の臣民」と云う言葉に反対する議員たちの抗議文に署名し、また一八三五年まで既存の制度に対する闘いを展開した。

この年、妻はモープラン氏に一児を、娘を授けたが、この子供の誕生が彼の魂を揺さぶつた。最初の二人の子供は彼に冷めた喜び、陽気さを伴わない幸福感を与えたに過ぎなかつたが、それは二人には父性を呼び覚ましたり、家庭に笑いを齎したりする某かの要素が欠けていたからであつた。二人ともモープラン氏に愛されはしたものの、熱愛はされなかつたのである。この子らの中に愉しみを見出そうとする父の希望は失望へと變つたのであつた。かねて夢見ていた如何にも子供らしい、腕白ないたずらっ子、嘗て軍人だった男たちが自分の若き日の血潮や火薬の音を思い出す縁にし得る可愛い悪童の代わりに、モープラン氏は理性的な子供、賢さの勝つた少年、彼の言葉を借りて言えば、少女を得たので、玩具ひとつ壊さないこの少年を後取り息子に得たことは、彼にと

つては羞恥混じりの大いなる悲しみなのだった。娘と一緒にいるときも、彼は同種の退屈を感じたが、それは彼女が生まれつき大人びた所のある少女だったからであつた。娘と遊んでいると、父には、彼女が自分を喜ばそうと勤めている様に見えて来るのだった。娘には幼女らしい時期は殆ど無かつたと言つてよい。五歳のとき、或る男が父に会いに来たが、彼女は洗面所に駆け去つてしまつた。様々な場面で彼女は困惑していたに違ひなく、父の愛や愛撫によつて揉みくちやにされるのをあらかじめ恐れて生れて来たかの様であつた。

この様に、押し殺され、長いあいだ積り積つて凝り固まつたモーブラン氏の全愛情は、彼がロレーヌ出身の母の名を取つてルネと名付けた新生児の揺籠へと向つた。彼はその毎日毎日を、彼の小さなルネとの戯れの為に費した。父は絶えず娘の縁無し帽を取つては、彼女の絹の様な生え初めた髪の毛を眺めた。父は娘に軽く響めつ面をすることを教えたが、彼女のその表情が彼を魅了した。父は娘にその小さな指でその小さな太腿を摘むことで、その肉付きの良さを人に示すことを教えた。父が娘に寄り添つて絨毯の上に寝そべれば、彼女は子供らしく、いじらしいほど無意識に、半ば裸の状態でごろごろした。夜には、父は娘の寝姿を眺める為に起き出してきて、長いあいだ花の薫りの様な人生の初めの息吹に聞き惚れた。娘が目覚める時刻には、父はその日のいちばん最初の微笑みを、寢覚めがまるで天国からの降誕であるかの様に思わせる幼女独特のあの微笑を眺めに来た。父の幸福は常に歓喜と共にあり、娘を愛することは恰も天使を愛することであるかのように思われた。

モリモンで娘と過ごした日々が彼にとって如何に喜びに満ちたものであつたことか！ 父は娘を小さな馬車に乗せて家の周りを連れ回したが、しじゅう彼の手の中で彼女が笑い叫ぶ姿や、その頬に落ち掛かる日の光や、その柔らかくふつくらしした桜色の小さな足やに目をやつていたものだつた。また父は娘を自分の散歩に付き合させた。彼は或る村まで行くと、挨拶してくる人々に対し、娘に投げキッスをさせて応え、ある農家に入ると、娘の乳歯を見せびらかした。帰り道では、しばしば娘は父の腕の中で、乳母に抱かれているかの様に眠つた。

またある時は、父は娘を森に連れて行ったが、そのロビンやナイチンゲールが沢山いる木々の下で、道の上の緑に轉りが溢れかえる一日の終りのあの時刻に、歩みを取り巻く賑々しさに浸されながら鳥たちに答え、歌声が聞こえて来る天に話し掛けようとするかのように幼子が何か言おうとしたり、眩いたり、どもったりしているのを聞いていると、彼は曰く言い難い心地よさを感じた。

しかし一方モープラン婦人はどうかと言えば、彼女はこの末の娘を然して可愛がりはしなかったのである。良妻賢母だったモープラン夫人は、田舎女らしい自負、家計を遣り繰りして来た女の矜持に満たされていた。彼女は子供二人という計算で家庭を切り盛りして来たので、三人目は上の二人への財産の配分に変化を齎す、特に長男の分け前を減少させる点で歓迎しなかったのである。併合した土地は分割され、掻き集めた財産は分散する、それらの事を通して将来、社会的地位は下がり家族の規模が縮小する、以上が母が次女が存在を通して抱いた危惧であった。

やがてモープラン氏は休む間も無いほど忙しくなったが、妻は絶えず子供たちの財産はあなた次第だと言って夫にけしかけた。彼女は彼をその友人たちや党から、また彼自身の信念への忠誠心からも遠避けようと努めた。妻は夫の、自分の地位を有効に活用しようとしないう頑迷さをあざ笑った。彼女は日ごと手厳しく攻撃してつき纏い、批判し、彼の野党議員に固執する意識に対する口やかましい家庭内での戦闘を仕掛け続けたのである。とうとうモープラン氏は妻に対し停戦を申し入れ、二ヶ月間考える時間を呉れないかと申し出たが、氏もまた自身の愛娘ルネが金銭的に富むことを望んでいたのである。二月経って、彼は議会に辞表を提出し、砂糖の精製工場を建てるためラ・ブリシュを訪れた。

それから二十年が過ぎた。子供たちは大きくなり、家は富み栄えた。モープラン氏は自身の精製工場で高い業績を上げた。長男は弁護士だった。長女は嫁に行った。ルネの持参金の準備は整っていた。

三

人々は屋敷の一階に戻って来ていた。インド更紗が広げて貼られ、壁紙に掛けられた野草の幾つかの小さな束の先に花々が咲き乱れている客間の一隅に、アンリ・モーブラン、ドノワゼル、ルヴェルシヨンがおしゃべりをしていた。暖炉の傍ではモーブラン夫人が愛情を表す大袈裟な身振りを以て、今しがた到着したばかりの娘夫婦のダヴァランド夫妻を迎えていた。こう云う状況に於いてこそ、家族愛を深め、母としての親心を示すべきだと彼女は考えていたのである。

モーブラン夫人とダヴァランド夫人の周囲にひけらかす様な抱擁がどうやら終ったところ、背の低い老人が客間に入って来てモーブラン夫人の前を目礼しながら通り過ぎ、そして真っ直ぐドノワゼルのいる集まりの方へと向った。

この小柄な男は黒い服を着、白い頬髯を蓄えていた。彼は紙挟みを一つ携えてやって来たのである。

彼はドノワゼルを部屋の窓が一つある引き込みへ連れて行き、紙挟みを彼に向って半分ほど開いて見せてから、「これ、知ってるかい?」と言った。

「それですか?……私はそれしか存知上げないものですから……それは『謎めいたブランコ』……ラヴランスの作品が原画の版画ですよね……」

背の低い老人は微笑んで「そうなんだが、まあ見てくれたまえ」

そう言って彼はまた紙挟みを僅かに開いてみせたが、その幅はドノワゼルのちょうど鼻だけが挟まる程度であった。

「上げ潮の前、と書いてあるだろう……彼女は上げ潮前なのさ、わかるよな？」

「その通りですね」

「それに余白を見てみる……光沢があるのが分かるだろ、な！これを手に入れるのには苦勞したよ、何せ相手は盜賊みたいな奴らだからな！ 途方も無い値段にまで釣り上げられた……しかも女にしてやられちゃった……」

「まさか！」

「とんだ連つ葉女さ……わしが値を上げる度に、考えさせて欲しいと言う。あの競売吏の惡党めは、「ご婦人にお譲りください」なんて絶えず言つて来るんだ。結局、百三十五フランの値がついた……まったく、もしあの時あと一錢でも高かつたら払うのは無理だったよ……」

「分りますねえ……ああ、貴方の御話をもつと前に御伺いしていたら、と申しますのも、これと殆ど類似した刷りの版画が、画家のスパンドレールの家にあるのを存じ上げておりまして……余白はより大きなものですけども……スパンドレールはルイ十六世に関わる作品には執着していませんし。彼にだったら頼むことが出来た訳ですが……」

「しまった！で、それは上げ潮より前の、わしのと同じ様なやつなのかい？確かかね？」

「上げ潮前ですね……前と言え……そうですね、あれは貴方のものより前の時期に刷られた版画でしょう……もっと古いものです……」

そしてドノワゼルの耳打ちが終ると、老人の顔は愉快な話のお蔭で紅潮し、その唇は唾液で濡れていた。

そのとき、モープラン氏が娘と共に客間に入ってきた。父は次女に腕を貸していた。彼女は氣だるそうに甘い風で頭を仰け反らせつつ、彼の腕に身を寄せ掛け、負ぶさった子供の様に頭髮を父親の袖に擦り付けていた。

「こんにちは、姉さん」とルネは言つて、姉を抱擁した。それから母に向つては額を突き出しキスをねだり、従兄とは握手ののち、紙挟みを持った男の方へ駆けて行つて、「見せて頂いて宜しいですか、代父さま」

「代子よ、それが駄目なんだな、もう少し大きくなってからでなくては」そう言つと彼は親愛の情を籠めて彼女の頬をひと撫でした。

「あーあ、貴方がお買いになつたものは、何時もこういうのよね」ルネはそう言つと、版画のコレクターたちの指先には御馴染みの、紙挟みを閉じる際に使う薔薇模様が精妙に描かれた紐を結び直している老人に、くるりと背を向けた。

「さてと、話を聞かせて貰おうかしら」とモーブラン夫人は次女の方を向くや、いきなり大きな声で言い、さらにルヴェルシオンをすぐ傍の椅子に坐らせたが余りに近かつた為に彼女の手振りやドレスが彼に触れる、と言ふか殆ど撫でるような形になつた。「あんた、川に押し流されたんじゃないの？ 危ないわよ、本当に……まったく！ あんな川で……よくもまあ、あなたは許したもののねえ……」

「きみ」娘とテーブルの上のアルバムを繰つていたモーブラン氏が答えて、「何も許した覚えなどないさ、ただ見過ごしてやつただけじゃないか」と言ふ。

「卑怯よ！」低い声でモーブラン嬢が父に向つて言ふ。

「いやあ、わたしが請負いますよ、ママ、このアンリ・モーブランが立ち会つていたのですから、何の危険も無かつたと請け負います。そりゃあ、ちよつとは彼らも川の流れに乗つたかもしれませんが……彼らにも、一キロ流されるよりは、船に擱まつている方を選ぶだけの賢明さはあつた訳でして。ま、それだけのことですよ。何でもありません……」

「安心したけれど」とモーブラン夫人は息子の一言ひとことに平静さを取り戻した表情で言い、さらに「あな

たが大変用心深いことは知っているわ。だけど、ルヴェルションさん、もうお分かりでしょ、わたしたちの可愛
いルネが酷くお転婆だつてことは。わたくし、何時もはらはらさせられ通しなんですの……あら見て、この子、
まだ髪の毛が濡れっ放し……いらっしやい、拭いてあげるから……」

「ダルドゥイエさんがお出でになりました！」と召使が報告に來た。

「ご近所の方よ」とモープラン夫人はルヴェルションに小声で伝えた。

「さてさて、あの方の進捗は如何かな」とモープラン氏は握手を求めながら今來たばかりの人物に問いただし
た。

「上手くいつていますよ……上手くいつています……新たに三百本の標柱を立てました」

「三百本もかね」

「三百本です……良い仕上がりになると思っています。ご存知の通り眺望の関係で、温室から池まで直進の道
を作りまして……四十五ないし四十七センチメートルの上りの勾配がありますが、それ以上のもものではありませ
ん。今その場にいれば、一目瞭然なんです……反対側については、ご存知だと思いますが、一メートルほどの
勾配の並木道をまた登ることになります。完成の暁には、モープランさん、私の地所は、申し分ない仕上がりにな
ると思いますよ」

「それでは何時、御植林なさるのですか、ダルドゥイエさん」とモープラン氏の長女が尋ねた。「お庭に職人さ
んたちをお入れになってからもう三年におなりになるのですし、近く御植林なさるおつもりなんでしょ？」

「ああ、植林で御座いますか、お嬢様、それは何でもないことなんです……何時でもできることです……
……先ず急がなければならないのは、土地の設計と起伏の整備でして……で、まあ、それから、お望みでしたら
植林と、云う順序になるんですね……」

何者か隣室から戸を押し開けて、客間に入つて来る者があつた。彼は挨拶したが、それに反応する者はなかつた。誰にも気付かれない様子のまま、彼はそこにいた。正直そうな顔をした男で乱れた頭髮はペン拭きを思はせた。それはモーブラン氏の出納係のベルナル氏であつた。

「さあ皆が出揃つた……ベルナル氏が降りて来ましたよ。あ、そうだな」とモーブラン氏は思い付いた風で妻に「そろそろ給仕させたらどうだろう、君……若い人たちは腹べこだろう」と言つた。

食欲を満たそうと黙々と食事を口に運ぶ数分が過ぎた。スープ皿に当つて鳴る匙の音に混じるおしゃべりが、夕食のはじめの沈黙に取つて代わつた。

「ルヴェルシヨンさん……」とモーブラン夫人は切り出した。

彼女は若者を右隣に坐らせ愛想良く振る舞つていたが、この青年と掛かり合おうとする姿勢が感じられた。注意深く彼を観察しつつ、また愛嬌を振り撒いてもいた。夫人は顔いっぱいに微笑を湛え、声まで何時ものとは違い、重要な儀式のときの為になつた声音を出していた。彼女の視線は絶えず若者から彼の皿へ、皿から召使へと移動した。母は娘婿になるかもしれない男を、しげしげと眺めていた訳である。

「ルヴェルシヨンさん、前回はわたくしたち貴方のお知り合いのド・ボニエール夫人にお近付きになりました……彼女は貴方の善行を褒めてお出ででしたよ、貴方の善き行いを……」

「光栄にも私は、イタリヤでド・ボニエール夫人とお逢いすることが出来まして……また幸福にも、少々夫人のお役に立つことさえ出来ました次第でして……」

「貴方、彼女を盗賊たちからお救いになられたんでしょ？」と大きな声でルネが言つた。

「いいえ、お嬢さま……そんな小説めいた話じゃございませんよ……ド・ボニエール夫人がホテルの支払いのことでお困りだったんです。お一人でしたし……彼女が代金を取られ過ぎないよう、私が取り計らつたと云うわ

けでして……」

「泥棒の話には変りないじゃない」とルネが言った。

「一編の戯曲が書けそうですね」とドノワゼルが横槍を入れる。「結末では二人が結婚に至ると云うおまけ付きの、新鮮味溢れる一編。それに素敵なタイトルを付す、「十五分の物語……ラブラー作」なんてね！」

「ド・ボニエール夫人と云う方はとても愛想の良い方で」とモープラン夫人がまたしゃべり出した。「あの方は表情に独特な個性をお持ちでいらして……貴方、ご存知でしょう、バルースさん」彼女はルネの代父の方を向きながらそう言った。

「確かにそうですね、奥さま、大変感じの良い方です……」

「あら、代父さま、彼女はサテュロスに似ててよ」とルネが言った。この言葉に周りが微笑むのを見て、彼女は顔が赤くなるのを感じ、「あら、顔だけよ」と強い語勢で付け加えた。

「上手な取り繕い方だな」とドノワゼルが言った。

「ルヴェルシオンさんは長らくイタリアにご滞在でしたか」と、話題を変えるためモープラン氏が尋ねた。

「六ヶ月居りました」

「何の様な印象でしたか」

「大変興味深いのですが、生活し辛いですね……一度もガラスの器でコーヒーを飲む事が出来なかった位です……から……」

「イタリアですか？」アンリ・モープランは相手の表情を読み取って答えた。「わたしにとってあそこの旅は、最高に悲痛でした……酷く不便な旅でしたね……農業も、商業もなつてない！ フィレンツェで仮面舞踏会が予定されていた日、とあるレストランで給仕に、夜も店は開いているかと尋ねたところ、冗談じゃない、昼間だけ

でも客が多過ぎる位なんだ……と言うじゃありませんか。人から聞いた話じゃありませんよ、私はこの耳で直接聞いたんですからね。これだけで国柄が分るうつてものじゃないですか。仮に英国に思いを馳せてみましょう、あの、集団の場合でも個人の場合でも發揮される強い統率力を考えてみてください、ロンドンでの英国市民の仕事に於ける才氣、ヨークシャーでの大農場に於ける効率化等を目の当たりにすれば、……そこにだって国民性が見て取れると言える筈ですからね」

「わたしもアンリと似た意見よ」とダヴァランド夫人が言った。「英国……あの国は秀でているわ……礼儀正しくて……とても素敵だわ、人を紹介する時の習慣なんか特に……お釣りを返すとき、それを紙に包んで差し出すみたいな、ま、そんな丁寧さね……そうそう、彼らは封印ひとつくるむ為に幾種類もの布を持っているのよね！ ロンドンの万国博覧会では、主人がね、ポプリンのドレスを買ってきて呉れたの……あ、ねえママン、私ね、短ケープ、買うことに決めたの。アルベリックの店に行ったのだけれど……とても面白い話よ、想像出来るかしら……彼は女子店員を使って客の肩に短ケープを掛けさせるのだけれど……それから彼はその客の周りを回り始めて、で黒檀の物差を使って僅かに客の体に触れながら、何処がまずいか指摘するの、ね、こんな調子で軽く敲いて、で、敲くたび、そこに女子店員が鉛筆で印をつけて……全く、本当に変わっているわよ、あのアルベリックって人は……でも彼だけよ……彼しかないわ……短ケープ一つにもスタイルを追求する人なんて！……昨日、競馬を観に出掛けたとき、彼の作った短ケープを着ている人を二人見掛けたわ……でも、ひどいのよ、彼の服、高いんだもの」

「同感！ 奴等は好きな丈ほりますからね」とルヴェルシオンが言った。「エドゥワール、というのは私の仕立て屋なんですけどね、三百万フラン稼いで引退しちゃいました」

「へええ、そりゃまた大変結構な話じゃないですか」とバールス氏が口を挟んだ。「こういう話に出会すと、変

に嬉しくなりますなあ。今日では、実際に労働に従事している者が財産を蓄えるようになった、とこう言うことでしょう！これは、世界が始まって以来の、最大の革命じゃありませんかね……」

「その通りですよ」とドノワゼルが呼応した。「この革命は有名な泥棒シャポンの「大統領閣下、窃盗は、世界で一番古い商売です」と云う言葉の真意を理解させてくれる縁になるんじゃないやありませんかね」

「ダービーは楽しかった？」とルネが訊いた。

「楽しかったけど、大変な人出だったわ」とダヴァランド夫人が答えた。

「大変楽しかったですよ、お嬢さま」とルヴェルションが言った。「特にディアース賞のレースは見応えがありましたね。倍率三十五倍のプリューム・ド・コックが二馬身の差でバジリカートに敗れたりしましたしね……とても感動的でしたよ。ハックスへの賭金は本当に見事なものでしたね……走りつ振りは一寸固かったですけど……」

「ところで、何時も四輪馬車に乗っているあのロシアの婦人はどなたですか、ルヴェルションさん」とダヴァランド夫人が訊ねた。

「ド・リスレフ夫人ですね。そう、彼女の馬たちは本当に見事でしょう……オルロフの純血種ですよ」

「やっぱり騎手と近付きにならなきゃ駄目よ、ジュール、ダービーやるなら」とダヴァランド夫人が夫の方を向きながら言った。「一般客に混じって見るのって酷く凡俗な感じがするわ。本当に、客どうし互いに少しだけでも敬意を保とうと思えば……女の場合は……特定の旗手を応援する特別観覧席で見るより他ないもの」

「あ、この茸の揚げ物ですがね」とバルースが言った。「貴女のこのアデルさん、腕を上げられましたな……本当に見事な腕前です……一寸行つて褒めて来ましょうか」

「あら、貴方、初めてじゃなかったんですか、それ召し上がられるの」とモープラン夫人が言った。

「一八四八年には食べてはいませんがね……」「十二月二日」までは、口にすることなどなかったですけれど……あの時分は何時も警察が茸を検査していたなんて、今じゃ信じられませんね。ま、秩序が回復して以来、そんなことも無くなりましたが……」

「アンリエット」とモーブラン夫人はダヴァランド夫人に声を掛けた。「あなたのご主人にひとこと言わせて貰うわよ……彼、わたしたちをないがしろにしているから……ほら、この間から、もう三週間も音信不通でしたよね、ダヴァランドさん」

「参りましたねえ、お継母^{かあ}さま、私の忙しさがご理解頂けたらと思いますけどね。私がジョルジュの良きパートナーだつてことはご存知ですよ……彼のお父さんは議会の仕事で日夜奔走しておられますが……従つて官房長のジョルジュの方に、沢山の仕事が回つて来る訳です。その中には、氣心の知れた人物や友人と呼べる様な人しか割り振れない内容のものがごまんとあるのですが……オペラ座での例の初舞台の際には、これまた大変な仕事がお座いまして……交渉や談判で頻繁に行ったり来たりを繰り返しましたが……それも、省庁間での衝突を避ける為だったのでして……実際、こここの所ずつと、私たちは本当に多忙でした……尤も私が無沙汰してしまつたのはジョルジュの所為だ、なんて申し上げている訳では御座いませんでして、彼は非常に親切な人ですしね……」「非常に親切だつて？」とドノワゼルが嘴を突つ込んできた。「まあ、あの男でも、貴方に二輪馬車での移動に掛かった費用くらいは支払つたのでしょけれどね……そう言えば、彼が貴方に郡長の職を託してからもう二年以上になりますね……」

「ドノワゼル君、状況は貴方が考えておられる以上に難しいものになっていますよ……それに、あまりパリから遠くに離れたくないと思えば……少なくとも、ここ丈の話ですがね、そろそろ今後の身の振り方を考えなくてはならない立場になっていると云うことは言えますよ。これから一月掛けて、真剣に考えなければならぬ課題

ですね……」

「初舞台と言うと、誰のことかな」とバルースが尋ねた。

「ラ・ブラディッツイです」とダヴァランドが答えた。

「え、ラ・ブラディッツイですか！……彼女には眩惑させられますねえ！」とルヴェルシオンが言った。「取り分け彼女が飛び上がるときの軽やかさは素晴らしい！以前、私は舞台に面した監督の機嫌で見る機会を得ましたが、彼女が踊ると、着地するとき音がしないんですよ……」

「昨夜、わたしたち、伺おうと思っていたのよ、アンリ」とダヴァランド夫人は自分の兄に向って言った。

「昨日は、僕は講演で忙しかったよ」とアンリが答えた。

「アンリは国会審議の委員会報告者に任命されたのよ」とモーブラン夫人が誇らしげに言った。

「あ、ダギュソー主催の講演会か……」とドノワゼルが言った。「で、相変わらずですか、貴方の爽やかな弁舌は。会場の聴衆は何人位でしたか」

「二百人ですね」

「それで、全員国家の要人と云う訳でしょう？驚きですね……処で君は、何に関する委員会報告者なの？」

「国民軍に関する法案に就いての委員会報告者ですけれど……」

「貴方は何でも承ってしまうんですね」とドノワゼルが言った。

「君は国民軍には参加する気はないんだろう、ドノワゼル」とバルース氏が口を挟んだ。

「絶対いやですね」

「でも制度化されているじゃないか」

「それは太鼓叩いて触れ回る布告役人が言っていることでしょ、バルースさん」

「だいたい君は投票にも行かないのだろう、恐らく」

「如何なる理由が有ろうとも行きません」

「ドノワゼル、私は怒って言うんだけど、君は悪い市民だよ。こういうことは君の血筋とも関係があるのだろうから、そこまで文句は言わないが、でも君のような態度は、まあ、どんな物かね……」

「悪い市民、て何ですか、それ」

「要するに君は何時も法律に逆らう覚悟でいるわけだろう……」

「私ですか？」

「君がだよ……ほら、ついこの間だって、君のおじさんのフレデリックの遺産相続の問題で……君は家督を彼の私生児たちに譲ってしまっただろう……」

「それが、何なんですか」

「それが、違法なんだよ、咎めるべき、嘆かわしい行為なんだ……法律ではどうなっているか。はっきりしている。法律では、婚姻以外で生まれた子供には、相続権は与えられないんだ。君は本当に知らないのか、僕は君にこのことは言っている筈だよ、それに君の公証人もそれに就いて黙っていた訳もなからう、第一、法典に書いてあるだろう。何をしているのだから。年端の行かない子供らに相続なんかさせて。法典も、法の精神も何もかもないがしろにして。あのな、こう云う条件でおじさんの財産を放棄するというのはだな、ドノワゼル、悪しき風習に加担する、と言うか加勢することになるんだよ……」

「バルースさん、その件に就いての貴方のご意見は承りました……が、それだからどうしろと仰るのですか？あの貧しい三人の子供たちを見たとき、僕が吸う葉巻が彼らの日々の糧に対して如何に不釣り合いであるかを思い知らされたのです……法的に完璧な人なんて、いないですよ」

「そう云う口吻自体、法に背くものだ。法律が何かを告げる時には目的がある、分るか？ 法律とは、不道徳に対抗する為に有るものだ。他の人までがお前の真似をしたら何うなるか、考えてみる……」

「怖がることはない、バルース」とモープラン氏が微笑みながら二人の間に割って入った。

「何人と云えども、好ましくらぬ例を示すべきではないのだ」とバルースは勿体振った口調で反論した。そしてドノワゼルの方に再び向き直って、「私の言っている事がよく理解出来ていて呉れたらなあと思うよ、ドノワゼル、わしは今度のことで君を低く評価したりはしない……寧ろ逆に君の無欲に敬意を表したい位なのだ。が、けれどもな、君が良いことをした、と言い切れるのかどうかと云う問題になると、それはまあ、無理なんだな。君の人生全般に就いても同じことが言える、不規則さが目立っているね。分らないかね！ 人と云うものはな、仕事に就いて、何事かに従事する、何処かに就職してだな、役所に身を置いたりなどしながら、国家に奉公するべきものなのだよ！ 君は頭も良いのだし、早いうちからそうしていれば、今頃は恐らく、月三四千フランは稼げる地位にいた筈だがねえ……」

「私は以前、それ以上の給与を頂く手筈になっておりましたがね、バルースさん」

「それ以上、だって？」とバルースが訊き返した。

「それ以上です」とドノワゼルは静かな口調で返した。

バルースは啞然とした表情で彼を凝視した。

「本当ですよ」とドノワゼルは続けて、「将来有望だったのです……五分の間だけですけれども。お話し致します……一八四八年二月二十四日のこと、私は何をしたら良いものやら分からない状態でおりました……朝、テュイルリー宮が占拠されて、辺りは一日中混乱が支配しておりました……私は不図、ある官庁で雇われている友人を訪ねてみようと思ひ至りまして……その役所はセーヌを挟んで宮殿の向かい側にありました。役所に着い

てみますと、人影がない！階段を昇り、友人が勤める大臣官房に入りますと、彼はおりません。私は葉巻に火を点して友人が現れるのを待ちました。そうして葉巻をくゆらしている間に、一人の男が現れました。彼は私が友人の席に坐っているのをみて、役所の人間だと思い込んだのです。彼は無帽でしたし、私もまた彼を省庁の関係者と思い込んだのです。彼は非常に礼儀正しく私に館内を案内するよう依頼してきました。私は彼を案内し、再び官房に戻りました。彼は或る主題に就いて一文を草するよう指示しましたので、私は友人のペンを取って書き上げました。彼はそれを読んで感心し、我々の会話は弾みましたが、彼は私の文章に綴りの誤りが見出されないのを強調しました。彼が私に握手を求めたとき、私は初めて自分が手袋をした儘であつたことに気が付きました……要するに、これはどう云うことかと言うと、十五分の審査ののち、彼は即決で私を秘書として雇い度いと言ってきたのです……彼は新任の大臣でした！」

「それで君はその申し出を断つたのか？」

「後から友人が参りまして……彼に地位を譲ってしまいました。彼は國務院の調査官になりましたがね……まあ、見習い期間が半日で、それでおしまいだったと云うことですね」

デザートの時間になった。モーブラン氏は身近にプチフルが幾つか乗った皿を引き寄せて、ぼんやりとそのうちの一つに手を付けようとした。

「あなた」とモーブラン夫人が夫に声を掛け、目で合図をした。

「いや君、ごめん、ごめん……左右対称だったね、その通りだ……忘れていた」そう言うと彼は皿を元の位置に戻した。

「あなたは何でも乱す癖があるから……」

「間違えた、君、許してね、間違えた……ご覧になりましたか、皆さん、我が妻は本当に優秀でしょう……」

実際、彼女が整えた左右対称の配置に手を付けようとする……我が妻の宗教の一つですね、左右対称と云うのは」

「あなた、何を言うの」とモーブラン夫人が言つて、田舎生活の一幕をその場で披瀝されたことに赤くなつて、今度は娘に矛先を転じ、「あらあら、ルネったら、何て姿勢をしているの！ ほら、ちゃんと背筋を伸ばしなさい、いい子だから……」

「はい」と娘は大変小さな声で呟くと、「ママンは私に当るんだから……」と独り言ちた。

「皆さん」人々が客間に戻つて来たとき、モーブラン氏は声を掛けて、「喫煙なさつて結構ですよ。こう申しますのも、我が息子のお陰なんです、幸運にも彼が家内から許可を取り付けましてね……」

「コーヒーはいかが？ 代父さま」とルネはバルース氏に訊いた。

「いや、結構」とバルース氏は応えた。「眠れなくなつて思ふので」

「今晚はうちでお休みになつてね」とルネは彼の言葉尻を捉えた。

「ルヴェルシヨンさんはいかが？」

「あ、わたくし、コーヒーは頂かないものですから、お嬢さま、結構で御座います」

彼女は行つたり来たりしていたが、自分が運ぶ盆の上の幾つかのコーヒー茶碗の熱い吐息のような湯気に顔を撫でられた。

「皆さん、行き渡りましたか」そう呼びかける母に、ルネはすかさず言い返す。

「さあ、どうかしら……」

ピアノで、或るポルカの最初の数音が客間に響き渡つた。そうして音が止むと、「踊らない？ 楽しいと思うけどな。ねえ、踊りましょうよ」とルネが言う。

「ゆつくり喫煙の時間を楽しませて呉れないか」とモーブラン氏が返す。

「ええ、パパ」そう言ったかと思うと、ルネは先程のボルカを今度は激しく弾き始め、腰掛の上で上体を揺らしつつ踊り出すと、彼女の足は床の上で爪先立ちになった。彼女は鍵盤を見ず、上気し、微笑んだ顔を客間の方に向けて演奏していたが、ダンスの熱で、眼は輝き、頬は赤くなっており、正に人々を踊りに誘っておきながら、伴奏しているうちに彼らの空気に吞まれて興奮し出してしまふ種類の少女そのものであった。彼女は肩を左右に大きく揺すっていた。全身が或る種の振動に絡め取られたかの様に波打ち、上半身がリズムカルに動いていた。と、彼女は弾き続けつつも、軽いステップで何か合図するかの様な仕草をした。そしてピアノの方に向き直り、頭で拍子を取りつつ、黒鍵と白鍵の上を手の動きに併せて目で追い出した。自らが演奏する音楽に集中する彼女の姿は、音符を打ち鳴らし、また音符を撫で、音符に話しかけ、音符を叱り、音符に微笑み掛け、音符を揺すり、音符を眠りに付かせるかの様に見えた。激しい鍵盤へのタッチを強調し、旋律を際立たせながら演奏するルネの一寸した体の動きの中には優しさが、その不図した仕草には情熱が見て取られた。上体を下げたり、また上げたりするので、頭に挿した鼈甲の櫛の先が光の中でずっと輝いていたかと思うと彼女の頭髮の影に隠れた。ピアノの左右にある蠟燭は音の響きと共に小刻みに震えていたが、各々、彼女の横顔に光線を投げ掛け、火影は額や頬、また顎の上で揺らめきつつ交わった。左右のイヤリングの珊瑚の輪の影が絶えず首筋の肌の上で揺れており、少女の指は、大変素早くピアノの上を移動するので、見ている者の側からは、何やら桃色した物が浮揚しているかのように見えている丈だった。

「この曲はですね、彼女の十八番なんですよ……」とモーブラン氏がルヴェルシオンに向って言った。

「彼女はキダンからレッスンを受けているのよ」とモーブラン夫人が付言した。

「はい、お仕舞い！」そう言うルネはピアノから離れ、ドノワゼルの前まで行つて立った。「何かお話をして、

ドノワゼル、私を楽しませて、どんなお話でも良いから」

そう言うのと彼女は彼の前に立ち続け、腕を組み、頭を心持ちのけ反らせ、片一方の足に重心を預けつつ一寸少年の様な空気を漂わせ、また或る種の傲岸不遜な感じが彼女の服装のやや無遠慮だが優美な着こなしを一層魅力的なものにしていた。合せ縫いの立ち襟、黒いリボンのタイ、白いチョッキの裏地は羅紗地の胴着の上にぴたりとくっ付いており、スカートの前面には外套風のポケットが付いていた。

「何時、親知らずを抜くの？ ルネは」とドノワゼルが訊ねた。

「ぜったい抜かない！」そう言うのと彼女は笑い出した。「結局、あたしの方が、何かお話しなくてはならないの？」

ドノワゼルは誰も聞いていないのを確認すると、声を低めて話し出した。「昔々ある所にパパとママと一人の少女がいました。パパとママは娘を嫁がせる為、何人もの立派な男性を家に呼びました。他方、娘さんと言うと、これまた申し分なく……」

「あーあ、詰らない！……あたし、裁縫でもしようかしら」

そう言うのと、テーブルの上の籠の中から縫い物を取って、そのまま母親の隣へ行って坐ってしまった。

「今夜はホイストはしないのかな」とモープラン氏が訊いた。

「勿論するわよ、あなた」とモープラン夫人が答えた。「テーブルはもう準備できているし……ね、ご覧の通りよ……後は蠟燭を点すだけ」

「貴方が欲しがっていた作品が競売に付されましたぞ！」とドノワゼルは、炉辺で馬車の乗客の様に頭を揺らしながら居眠りを始めたバルースの耳元で大きな声を出した。バルース氏は飛び起き、すかさずドノワゼルはトランプを一枚差し出して、「スペードのキング！ さあ、始めますよ！ ホイストに御参加願います」

「今夜は大分お疲れで御座いましょう、お嬢さま」とルヴェルシオンは近付いて来て言った。

「あたしが、ですか？ 一晩中だって踊り通せるわ！……見ての通りよ」

「そこで何をお作りになつていらつしやるのですか……ああ大変お綺麗ですね」

「これ？……あ、うん、綺麗でしょ……これ、靴下なの……あたし、冷え性だから、自分の足の為に編んでるの……暖かく過ごすため、それだけよ……針仕事は得意な方じゃないんだけど、言つてしまふわ……刺繍とかつづれ織りつて細心の注意が必要で、それが一寸でも欠けると……ほら見て、この指……一度仕事を始めるとこんな風になつちゃうの……満身創痍でしょ……」

「なあ、ルネ」とモーブラン氏が話し掛ける。「妙なんだ。負けっ放しで、ちつとも勝てやしない……」

「あらあら、お相手はとても良い方ね……こちらへお呼びしましょうかしら」とルネは返事をしたかと思うと、行き成り、「ドノワゼル！ こっち！ こっち来ない？……ここ……もつと近く、もつと近く……来てよ、ねえ……ここへ今すぐ。はい、今度は、跪いてください……」

「何してるの！」とモーブラン夫人が大きな声を出した。

「ルネ」とドノワゼルが言った。「君は僕のマリッジをしくじらせる誓いを立てでもしたかのような……」

「ルネ、見に来てごらん、見に来てごらん！」とモーブラン氏はトランプをしているテーブルから父親らしい慈愛に満ちた声で話し掛けた。

「え、なーに？」とルネは返事をしつつ、鉢をちやきちやき言わせながらドノワゼルと戯れている。「始めに注意しておくわね、じつとしていなくちゃ駄目！……ドノワゼルは何時も散髪の仕方が良くないのよ……カットが良くないの……何時見ても、額に汚く髪の毛の房が落ち掛かつて……それが、見る者をしてあなたを怪しませる原因よ……この問題の部分の部分を切つてあげたいの……あら、怖がつてる！ 大丈夫、私、散髪、上手なんだから、

パパに訊いて御覧なさい！」そう言つて彼女は短い間に、二三回鋏を動かしてドノワゼルの髪を切つたかと思うと、暖炉の方へ行つて竈の中にそれをばらばらと捨て、また戻つて来てから、「もしかして、あなたの髪の毛を私が大事に取つておく為にあつちへ行つたのだと思つた？」と言つた。

ルネは、兄が通りすがりに肘でつついて何か合図をして行つたのを感じしなかつた。母親は一瞬顔が赤くなつたかと思うと、今度は酷く青くなつたが、自身ではその変化に気が付かなかつた。父親は、ホイストをしている連中の輪から抜け出してきて、困惑した態のむつとした表情で妻の傍へ来たが、妻は夫が吸い始めたばかりの紙巻を取り上げ、それを自分の口元に持つていくと煙をひと吹きし、夫に目配せしてから言つた。「おお！ 何とこの醜態でしよう！」

「まったく、本当だよ、ルネ」とモープラン氏が厳しくも、無念さを隠せない語調で言つた。「本当に、何と言つたら良いか分らないが……今夜の様なお前は、私は未だ嘗て見たことがないな……」

「紅茶を持つて来い！」呼び鈴で呼び付けた召使にモープラン氏が命令した。